

平成20年度 発掘調査速報会



平成20年10月4日(土)・5日(日)
財団法人山形県埋蔵文化財センター

次 第

平成 20 年 10 月 4 日（土）

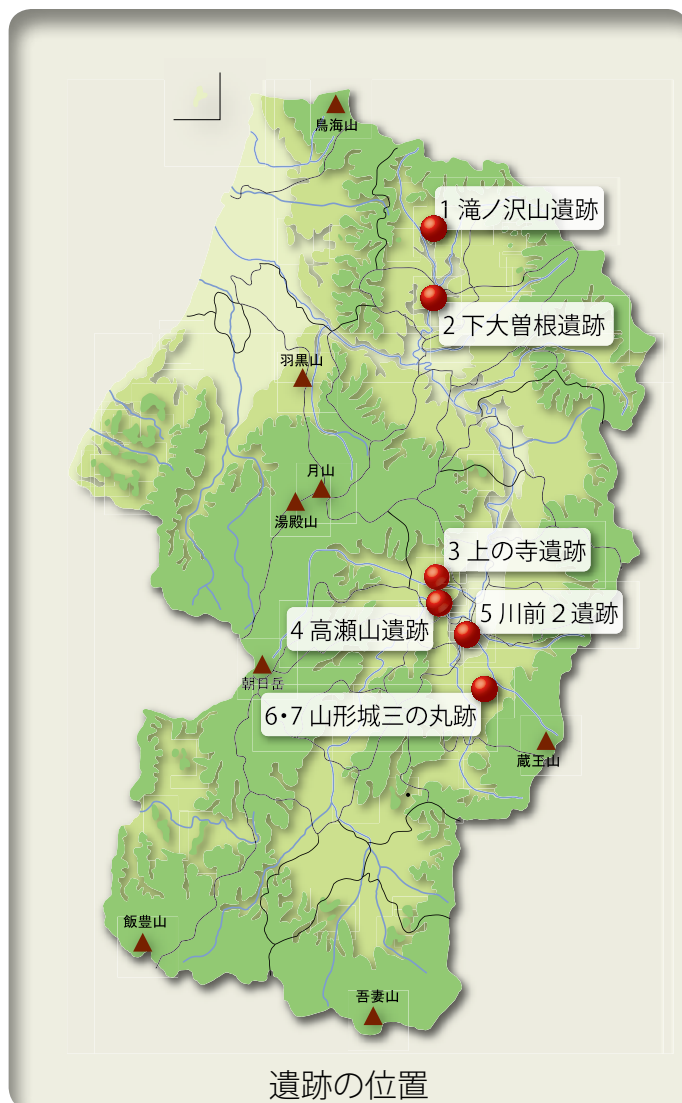
5 日（日）

13：30～14：45

（4 日・5 日とも同じ内容で行います。）

■報告内容

- 1 平成 20 年度発掘調査の概要
- 2 滝ノ沢山遺跡
- 3 下大曽根遺跡
- 4 上の寺遺跡（第 2 次）
- 5 高瀬山遺跡（HO 3 期）
- 6 川前 2 遺跡（第 4 次）
- 7 山形城三の丸跡（都市計画街路）
- 8 山形城三の丸跡（国道 112 号）



遺跡の位置

■平成 20 年度 財団法人山形県埋蔵文化財センター発掘調査遺跡一覧

	遺跡名	所在地	時代	種別	調査面積	調査期間	事業名
1	滝ノ沢山遺跡	真室川町大字大沢 字滝ノ沢山	縄文	狩猟場	1,500㎡	5/12～7/30	国道 344 号 特殊改良一種
2	下大曽根遺跡	鮭川村大字庭月 字下大曽根	平安 中世・近世	集落	6,000㎡	5/12～9/9	経営体育成基盤整備
3	上の寺遺跡 （第 2 次）	寒河江市大字慈恩寺 字上の寺	縄文・奈良・ 平安・中世・ 近世	集落 寺院	8,290㎡	4/21～11/21	農免農道整備
4	高瀬山遺跡 （HO 3 期）	寒河江市大字寒河江 字高瀬山	旧石器・縄文・ 古墳・奈良・ 平安・中世	集落 古墳	2,000㎡	5/13～6/27	最上川ふるさと総合 公園都市公園整備
5	川前 2 遺跡 （第 4 次）	山形市大字中野目 中山町大字長崎	古墳・奈良・ 平安	集落	4,500㎡	5/12～10/31	須川河川改修下流部
6	山形城三の丸跡 （都市計画街路）	山形市春日町	中世・近世	城館	1,100㎡	6/23～11/6	都市内街路 ネットワーク整備
7	山形城三の丸跡 （国道 112 号）	山形市旅籠町	奈良・平安 中世・近世	集落 城館	1,700㎡	6/16～10/31	一般国道 112 号 霞城改良

滝ノ沢山遺跡は、JR 真室川駅から北西へ 2 km、真室川中学校の向かい側、通称「秋山」と呼ばれる所に位置しています。鮭川と真室川にはさまれ、舌状に延びた台地上にあり、標高は 134m ほどで、調査前は雑木林でした。

検出された遺構には、^{おとしあな} 陥穴をはじめとする土坑、ピット、火を使った跡と思われる遺構などがあります。

陥穴は、調査区の中央部に 4 基検出されました。いずれも沢に対して平行に掘られていたことから、沢に水を飲みにきた動物が自然に落ちるように作ったのか、または、高台の方から獲物を追い込んで落したのではないかと考えられます。

また、火を使った跡と思われる遺構が、調査区の中央部と北側に 1 基ずつ、2 ヶ所見つかりましたが、竪穴住居などは検出されなかったため、生活の場はもう少し高台のほうにあったものと思われます。遺構の内部には赤茶色に焼けた土が残っていたことから、炉の跡か、たき火の跡と考えられます。



^{おとしあな} 沢に向かって平行に 4 基の細長い陥穴が掘られていました。いずれの陥穴も長さ 3.5m、幅 0.4m、深さ 1m ほどありました。

遺物では、縄文時代の土器と石器が出土しました。出土した縄文土器は大半が破片でしたが、それらの破片に付けられた文様などから、縄文時代早期～晩期（約 7000 年前～3000 年前）にかけての土器の一部と見られます。

石器は、^{いしべら} 石筥、^{そうき} 搔器、^{いしきり} 石錐、^{すりいし} 磨石、くぼみ石などが出土しています。石器の製作時にできるかけら（^{はくへん} 剥片）も多数見つかり、それらをはがし取った際に残った原石にあたる石核（コア）も 2 点出土しました。

これらの出土した遺構や遺物から、この遺跡は縄文時代の狩猟の人のキャンプ地だったと思われます。

（福岡和彦）

滝ノ沢山遺跡から出土した遺物です。
奥から、石核・石斧・石筥・搔器・石錐などです。



下大曾根遺跡は JR 羽前豊岡駅の南西約 600 m に位置し、付近には最上三十三観音“打ち止めの霊場”として有名な庭月観音があります。遺跡は、鮭川と最上内川による河間の自然堤防上に営まれた平安時代と中近世の集落です。

見つかった遺構には、平安時代の竪穴状遺構・土坑・柱穴群などと、中・近世以降の井戸や溝などがあります。

竪穴状遺構は 6 棟確認され、このうち 4 棟は南北方向に重複して検出されました。大きさは一辺 2.5 m ほどの方形で、小規模なことから住居ではなく、^{なや}納屋や

馬屋であった可能性が考えられます。土坑は大きさ深さとも様々ですが、堆積土中に火山灰の積もった土坑が 3 基あり、いずれからも土器がまとまって出土しました。この火山灰は、西暦 915 年に青森・秋田県境の十和田で噴火した際に降下したと考えられるものです。柱穴は調査区全域にわたって分布しており、中には等間隔で一列に並ぶものもありますが、建物として組み合わさるものはありませんでした。



平安時代に使われた土師器の坏がまとまって出土しました。中央に白く見えるのが堆積した火山灰です。



調査区北側半分の遺構検出状況です。直交する溝や、方形の竪穴状遺構が見つかっています。

中・近世の遺構としては、東西・南北方向に掘られた溝や、大きな掘り込みで深さが 2 m を超える井戸と推測されるものなどがあります。

遺物は平安時代の^{はじき}土師器・^{すえき}須恵器・黒色土器が多く出土しています。土器はほとんどが破片で、復元できるものは多くありませんが、煮炊き用の土師器の甕、貯蔵用の須恵器の^{かめ}甕・壺、食器である土師器や黒色土器の坏などが認められます。火山灰を含んだ土坑からは、ほぼ完全な形の土師器坏が出土しました。これらの土器類は、火山灰の存在により時期が明確なことから、同時代の指標となり得るものです。

中近世の遺物として、碗・皿や播鉢の陶磁器類、古銭などがあります。古銭は中国の宋時代（11 世紀）のもので、溝から出土した青磁の碗とともに輸入品と考えられます。

周辺には縄文時代や中世の遺跡などが、鮭川流域の段丘に沿って点在していますが、古墳～平安時代の遺跡が少ない最上地方においては、時代考証をする上で貴重な発見となりました。
(須賀井新人)

かみ てら 上の寺遺跡

—山腹に広がる中世寺院—

寒河江市

上の寺遺跡は、国指定重要文化財の薬師三尊や十二神将で有名な、寒河江市の慈恩寺の近くにあります。

慈恩寺は神亀元年（724）、行基の開山と伝えられます。平安時代には摂関家藤原氏や平泉藤原氏、鎌倉・室町時代には寒河江荘地頭の大江氏、戦国時代から江戸時代の初めにかけては山形の最上氏の保護を受けて繁栄しました。

遺跡は山の斜面にあり、サクランボなどの果樹園が広がっています。一帯には斜面を平坦に利用するための、段々畑状の地形が作られ、中央には、「箕輪道」という古い道が通っていました。

調査では、鎌倉時代から江戸時代を中心とした遺構・遺物が見つかりました。

中世に薬師三尊や十二神将を納めていた聞持院というお寺の伝承地の近くからは、6×7間の規模で並んだ大型の柱穴列が見つかりました。建物か区画のための施設と考えられます。付近からは宝篋印塔などの石塔が出



人が入れるほどの大きさの柱穴が長方形に並んでいます。

土しています。また、幅2m、深さ1mの大きな溝が見つかりました。溝の最上層からは16世紀末の遺物とともに、石塔が出土しており、江戸時代になる直前、溝を埋め、石塔を捨てるような、大きな変化があったと考えられます。

現在の慈恩寺に近い調査区からは、石組の井戸や、石を敷き詰めた道路の跡が見つかりました。井戸の石組周辺や道路の石敷きの下から、江戸時代初め頃の遺物が出土しています。このことから最上氏が慈恩寺本堂や三重塔を再建した時期に、その周辺でも様々な整備の動きがあったことがわかってきました。

今回の発掘調査の結果、上の寺遺跡の多くの地点に中世から近世の寺院に関する遺構や遺物が分布していることが確認できたことにより、現在の慈恩寺本堂周辺だけでなく、山腹一帯に広がる慈恩寺の姿が明らかになってきました。豊富に残された仏像や文献資料、舞楽などの民俗資料に加え、今回の発掘調査により、より豊かで深みのある慈恩寺や地域の歴史を描くことができる貴重な資料を得ることができました。

（高桑 登）



江戸時代の井戸跡です。深さは地表から約3mありました。10～20cm大の石が積まれています。

高瀬山遺跡は、寒河江市の南部、最上川左岸に面した高瀬山（標高122m）の周囲にあります。高速道路や公園整備などとともに発掘調査が行われてきました。今回は、平成16・17年に行われた高瀬山遺跡（HO）2期に続く、高瀬山遺跡（HO）3期発掘調査になります。調査区は、近年果樹園として利用されており、遺跡内には鉄剣が発見された県指定史跡「高瀬山古墳」があります。

発掘調査は、公園の造成にかかわって、上下水道管や地下送電線などの埋設工事で遺跡が破壊されてしまう部分が対象になりました。幅1～2mのトレンチ（溝）調査が中心で、29調査区があります。トレンチによる発掘調査ですので、面を調査する発掘とは異なり、遺跡の全容や大きな遺構の全体の姿をとらえることは困難です。しかし、遺跡を壊す面積を最小限にできるというメリットがあります。

今回の調査では、縄文時代の土器と多量の



竪穴住居跡の隅の部分にカマドとみられる焼土が残ります。

土器片、石器、石器を作製するときに発生した剥片（フレイク）、古代の土師器、須恵器、少量ですが近世の陶磁器が出土し、文化財登録数36箱となりました。

ほぼ完全な形に近い縄文時代中期ころ（約5000年前～4000年前）の土器3点が出土した土坑は、お墓（墓坑）の可能性あることから、今後、理化学分析を実施して確認していくことにしています。

遺構としては、段丘の下調査区から、隅の部分のみですが、竪穴住居のを1棟検出しました。煙道（煙出しの穴）は確認できませんでしたが、カマドと考えられる焼土が見つかりました。土師器の甕が出土していることから、古代（奈良・平安時代）の住居と考えられます。その他、多数の土坑、溝を確認しました。大きな溝については、隣接する高瀬山古墳に関連する周溝（遺構の周りにめぐらされた溝）なのか、あるいは別の古墳の周溝なのかなどは不明です。

なお、来年度も引き続き2次調査が行われることになっています。（榎綾）



土坑から縄文土器が出土した様子です。

川前2遺跡は、JR羽前長崎駅の東方2.8kmに位置した1,600～1,700年前の古墳時代の初め頃と、1,200～1,300年前の奈良・平安時代の集落です。洪水が頻発した場所に営まれた集落ですが、水に浸かりにくい高台に、何度も家を建て替えていた様子が明らかにになりました。

今回の調査では、竪穴住居32棟、溝7条、土坑17基、畑、河川、掘り込みを伴わない土器集中区などが検出されました。住居は調査区中央の微高地から、古墳時代12棟、奈良・平安時代14棟の住居（時期不明6棟）が検出されました。奈良・平安時代の住居より下位で、古墳時代の住居が検出されたことから、古墳時代に冠水で埋まった場所に、奈良・平安時代の集落が形成されたと考えられます。住居はいずれも重複しており、冠水しにくいやや高い場所に、集中して居住域が形成されていたことが明らかになりました。

また、昨年の調査区に接する調査区南側には、並行した浅い溝が多数検出されました。古墳時代の土層よりも上位から掘り込まれた様子が観察されており、古代の畑と考えられます。

川前2遺跡が位置する須川下流域は、最上川の合流点が近く、白川や立谷川も合流しており、水運の便に適した地域でした。しかし当時は高い堤防がありませんでしたので、増水時には、洪水の危険に常にさらされていました。川前2遺跡のムラは、水運の要衝とし



古墳時代の住居が重複しています。いずれも壁に沿って細い溝が巡らされ、4本の柱穴が認められました。

て発達したと推測され、その利便性から冠水した後も、同じ場所に居住が繰り返されていたと考えられます。また集落の周囲からは、意図的に廃棄した古墳時代の土器が多数検出されましたが、洪水を回避するための祈願や儀式が執り行われた結果であったと推定されます。（小林圭一）



夏休み期間中、中山町と寒河江市内の小学生が発掘調査を体験しました。

山形城は、14世紀後半に^{しばかねより}斯波兼頼が築いたと言われます。文禄・慶長年間（1592～1615）に、最上義光によって城が改築され、本丸・二の丸・三の丸と三重の堀を構えた城郭・城下町が建設されました。

今年度は、広い三の丸の中で、春日町と旅籠町の二か所を調査しています。

春日町の調査区は、三の丸の11カ所の出入口の一つである飯塚口の近くに位置します。この辺りは、江戸時代後期には田畑になっていたと言われるところです。

調査の結果、今回の出土する遺物や生活の跡を示す遺構が、以前調査した地点と比較すると異なることから、土地の利用が、その移り変わりを示す伝承のとおりであったことが発掘調査により裏付けられました。

また、三の丸の西側の堀の一部である箇所も確認できました。

堀については、9月中旬の段階で、約45度の勾配で掘り込まれていることが確認できました。堀からは、瓦、陶磁器、木製品が出土しています。堀を埋め立てた時に一緒に混じったものと考えられますが、当時の生活の様子を明らかにするための貴重な資料です。



三の丸の堀を調査しています。

城の地点によって土の質が異なっていることから、堀の構築がすべて同じではないものと推定され、今後の考察によって、城の内と外を区切る堀が、どのように建設されたのか、今後の考察によって明らかになることが期待されます。（庄司隆志）



柱の跡や溝など多くの遺構が見つかりました。

旅籠町の調査区は、三の丸の北東角に近い位置にあります。

見つかった遺構には、建物の柱を立てるために掘られた穴、地下倉庫やごみ捨てに使われたと考えられる大きな穴、排水や区画のために掘られた溝など数多くあります。これらの遺構の大半は、三の丸が整備され機能していた頃のものですが、今回の調査では三の丸の時期より、さらに約800年もさかのぼる奈良・平安時代の遺構も見つかっています。

出土した遺物は、瀬戸・肥前などの国産陶磁器や中国産の青磁、古銭、石製品などの種類があり、当時の生活の様子を伝えています。また、土師器や須恵器といった奈良・平安時代の土器や瓦、さらには縄文土器も出土しています。これらのことから、三の丸が造られるはるか前より人々が生活の場としていたことがわかります。（伊藤邦弘）